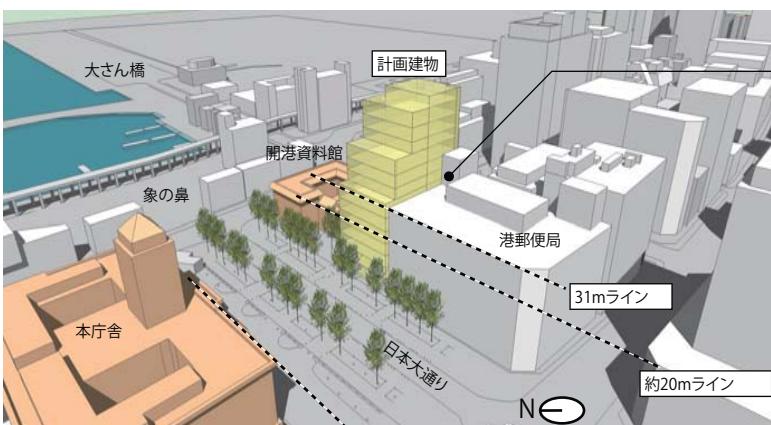
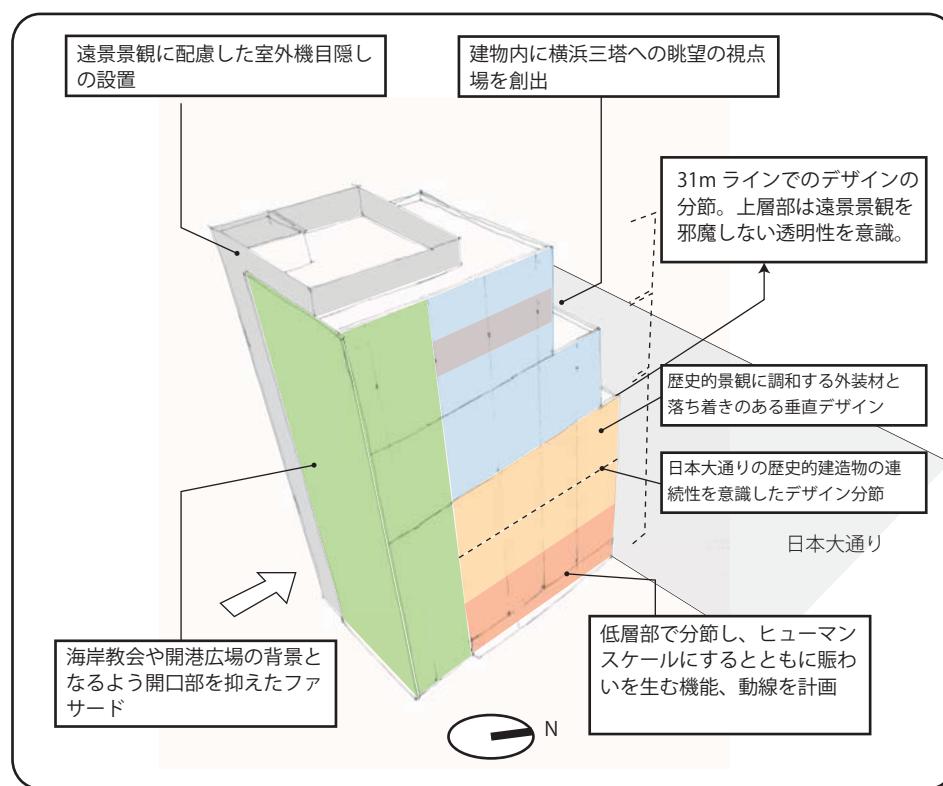
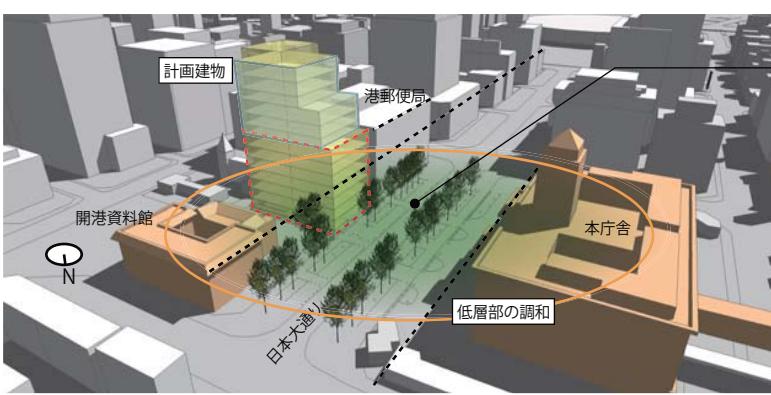




海から見たときのボリュームと景観調和を図るコンセプト



日本大通り地区特定地区ガイドラインにより、31m、45m、60mの壁面後退を行い日本大通りのスカライン形成を図ります。同時に本庁舎や情報文化センターをはじめとする歴史的建造物の軒高や建物高さの一つの指標である約20m高さを意識して調和を図ります。



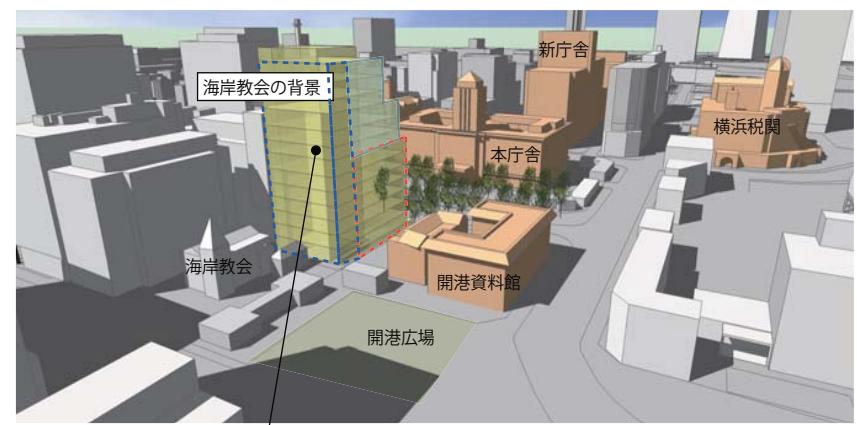
約31m、約20m付近の高さのデザイン分節を行い、日本大通り沿い、そして横浜港からの眺望を意識します。31mより上部はガラス等を用いながら、空に透過していくようなデザインとすることで、主張し過ぎない調和の取れた外観とします。



日本大通り側からのイメージ



海岸教会、開港広場側からのイメージ

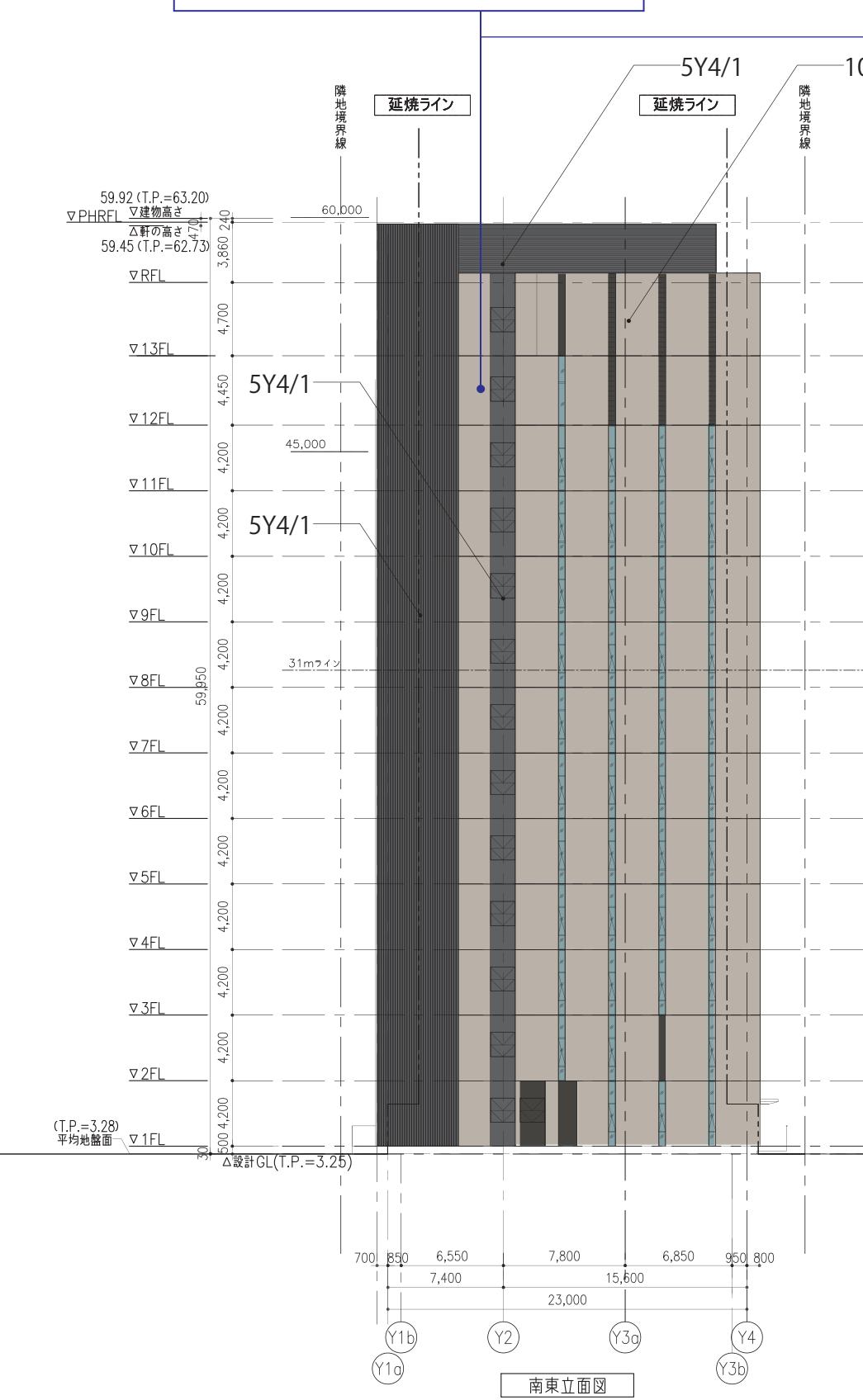


東側の敷地は海岸教会が建っており、東側立面は見合いに配慮しつつ、海岸教会の背景として垂直性のある伸びやかな立面として、開口部を押さえながら計画し、開港広場側に対しても背景となるようなデザインとして景観の調和を意識します。

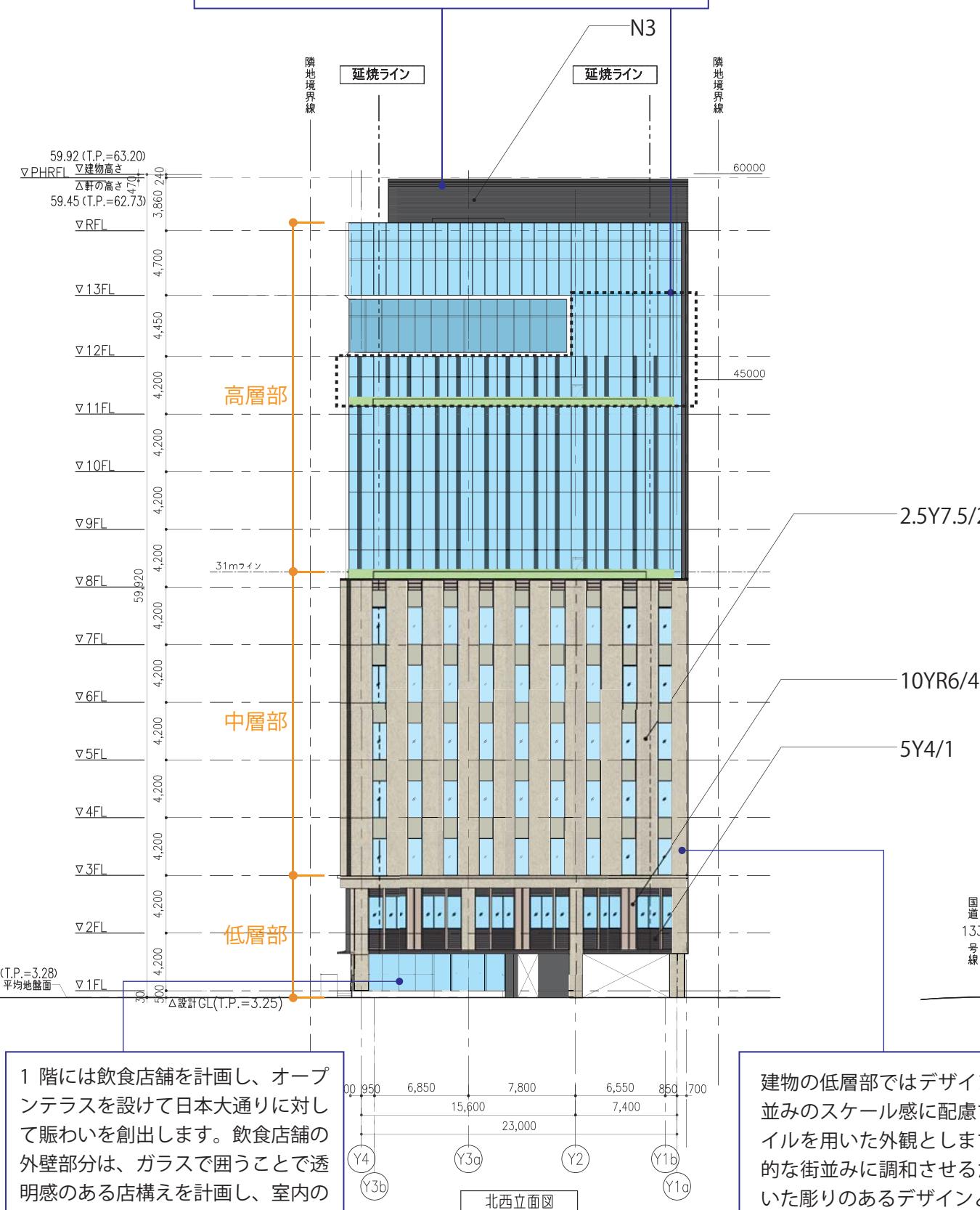
■さまざまな要素との関係性を読み解く3つの視点

計画建物と周辺要素との景観形成の図り方については、「遠景」「中景」「近景」といった対象に分類し、具体的な呼応関係を次項に記します。

開港広場や海岸教会に面する部分は、両施設の背景となるように開口部を抑えたデザインとして周辺との調和を図ります。



北西面の目隠しルーバー部、11階 12階の縦ルーバー部には神奈川県が推奨する太陽光発電を組み込んだルーバーとします。



日本大通りの地区計画に定められた壁面後退を実施し、スカイラインの調和を図る計画とします。最上部には設備機器が設置されるため、目隠しルーバーによって景観に配慮した計画とします。

